

空の^{もと}下で（或青年）

悲しみの重さにしゃがみこんだ僕の
祈るように組まれた手の前に
めらめらと楽譜は燃えている

僕に数知れぬ涙を流させた楽譜が
灰になった僕の目の前で、今
高く、高く立ち昇ってゆく

愛が全ではないということが
僕をして自ら愛を抉り出して棄てさせた
たとえそれが真実であったにせよ

薄雲が唯一点を目指して渡ってゆく
何という高さと広さだったろう
小っぼけな真実にしがみついていた僕に
それは花の香りのように漂って
ぐいぐいと一点へ僕を引いていった

(1982.7.3)